

トランスジェンダー をいきる (15)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

私と三療とトランスジェンダー

1 はじめに

「三療」とは、あんまマッサージ指圧・鍼・灸の総称で、視覚に障害のある私達の職業選択として、古い歴史を持っている。

高校卒業後、3年の就業年限を経て、免許を取得し、将来、病院や治療院に勤務したり、自宅で治療院を開業したりして生計を立てていくというのが、視覚に障害のある人の社会的ステータスとして自明化されている名残は、現在でも残っている。

私も例外なく、高校卒業後、三療の免許取得のために、盲学校の専攻科理療科に進学した。その勉学を進めていく中で、特に心身の性別の不一致によるさまざまな違和感と直面し、どのように対処したかについて記述する。

また、治療院で女性として働くということがどのような意味を持っていたか、そして現在、男性として就職し、在宅マッサージという私にとっては新しい仕事に着くことになったことで、私と三療とトランスジェンダーとが、対人援助の場面で、今後どのようなかかわりを持つのかについて記述する。

2 あんまマッサージ指圧・鍼・灸免許取得の勉学におけるさまざまな場面での性別違和感

① 基礎医学・臨床医学・東洋医学の学びにおける自己の身体の性別違和感からの逃走

専攻科理療科に進学して、基礎医学・臨床医学・東洋医学を学んでいく中で、「男女の性別の

差異」は付き物であった。基礎医学では、例えば解剖学や生理学のように、人間の体の骨格や筋肉の付き方・運動能力などの男女の差異を生態観察や模型によって触察することを通じて、自己の体内にある細い骨格を否定し、太い骨格を自己のものであるべきだというように、自己の身体を「間違っただけの身体」として認識した。また、臨床医学では、統計的に男女によってかかりやすい疾患を逐次反転させ、自己の身体は男性にかかりやすい脳卒中や高血圧症などであって、女性にかかりやすい骨そしょう症や貧血などにはかからない、というように自己説得していた。

東洋医学では、総合的に患者を診るというスタンスが基本である。にも関わらず、男女の性別の差異は否めないということに、いやというほど気づかされた。

東洋医学の中でも特に注目したのが「陰陽論」である。「陰陽論」は、古代中国に起源を持つ自然哲学思想である。最初は、カオスのような宇宙万物であると考え、その混沌とした中から明るい光に満ちた陽気が上昇して天となり、重くにごった陰気が下降して地となった。この陰と陽の2つの気によって、宇宙万物のさまざまな事象を理解しようとしたのが陰陽説であった。

陰と陽は、もともと天候と関係する言葉で、陰は曇りや日陰・陽は日差しや日向をさしていたが、BC4世紀ごろ、すべての事物において、消極的なものを陰、積極的なものを陽とみなす「陰陽二元論」哲学原理に体系化された。そこでは、陰陽は、共に対立する性質を現しており、受動的な性質を陰（女・弱・静・地・月・冬・裏など）、能動的な性質を陽（男・強・動・天・日・夏・表など）に分類した（汪, 2011 pp50-51）。

このような東洋医学の哲学思想を受けて、自己の身体を、男のように陽の性質を持ち、女のような陰の性質は持たない、というように、陰陽論を自己の都合のよいように利用して、男女を二分させ、自己を男性の部類に帰属させていた。

このようにして、さまざまな医学の学びに置いて、随時自己の性別に違和感を覚えながらも、自己を男性の生き物として帰属させることによって、「性別違和感からの逃走」を図りながら勉学に励んでいた。

② マッサージ実技は、男女の体力の差異と体重差が表面化した「修羅場」

男女の体力の差異がもっとも表面化した場が、マッサージ実技であった。女性の身体であるということで、マッサージ実技では劣位の位置に立たされ、自己の身体がマッサージの術者（マッサージをする側）・非術者（マッサージを受ける側）の別を問わず拒絶していた。加えて当時は、同じクラスメートの女子に比して痩せ型で筋肉や筋力がなかったため、女子の中でも劣位の座は変化しなかった。そのことが、技術の向上を阻み、比較的技術の優れたクラスメートの中で、私の技術だけは「下手のピカ 1」という烙印を押されるくらい、他のクラスメートとの技術の差は歴然としていた。そのような状況の中で、もともと体を動かすことが好きだった私は、スポーツを通じて体力を身に付け、それに伴って技術も向上してきたものの、マッサージ実技への拒絶の仕方に変化はなかった。

③ 鍼実技の性質から、自己の男性性を見出し、「武器」として技術向上へ

マッサージ実技が修羅場であったのに対し、鍼灸の実技はオアシスの場、つまり、鍼灸の実技

は、男女の体力の差異がほとんど認められないという利点によって、逆にクラスの中でもトップの技術を維持していた。中でも、マッサージ施術では解消できない凝りや炎症性のある痛みへの鍼施術の即効性は、即効性＝男性性、すなわち、もんでさすって解消できなければ鍼を刺して解消する、炎症性の痛みには、下手に長くもむより鍼の弱刺激で短時間の施術、というように、鍼施術の性質の中に男性性を見出した。ここでは、マッサージ施術と鍼施術を対比させ、マッサージ施術の体表に当たる面積の広さや治療に要する時間の長さ、コミュニケーションツールへのアクセスのしやすさから、女性性と位置付け、逆に鍼施術はピンポイント性の刺激による絶大な治療効果、マッサージ施術に比して体表の当たる面積が狭く、コミュニケーションツールへのアクセスの希薄さという性質から、男性性と位置づけた。その上で、男性性の高い鍼の技術を武器として向上させることで、自己の身体への性別違和感に対処した。したがって、前述したように、マッサージの技術が鍼の技術に比して向上しなかったのは、マッサージの技術全体を女性性と位置付けたことで、その女性性を嫌悪、拒絶したからに他ならない。

3 マラソンとの出会い

このようにして、さまざまな授業の場面で、絶えず性別違和感を意識させられたのだが、専攻科理療科の2年生から、盲学校の近くの老人ホームに治療奉仕に行くことになった。それは、盲学校の臨床の授業で強制的に行かされるというのではなく、専攻科理療科の生徒たちを中心に理療科研究クラブを発足し、そのメンバーで月に1度の土曜日の午後に、老人ホームに出向いてマッサージ・鍼灸を行うというボランティア的要素と、この奉仕活動を通じて、社会勉強をしたり、マッサージや鍼灸の技術を向上させるという目的で行われていたものであった。

ちょうどそのころ、ふとしたきっかけで、私はキリスト教の教会に行くことになった。私は中学生のころから、聖書の言葉を点字で読んでいたので、聖書の言葉を聞きに行くというよりはむしろ、どのような人たちが教会に集まっているのだろうかと思いながら、境界に1歩足を踏み入れた。すると、次のような聖句が、私の胸を打った。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11章28節)

(私は「疲れている人」なのだろうか。もし、私が「疲れている」としたら、いったい何に「疲れている」のだろうか。もしかすると私は、専攻科理療科のさまざまな授業における性別違和感に疲れているのだろうか。そうだとすれば、私はもはや、自分では気づかないくらいにその「疲れ」を自明のこととし、その「疲れ」にどっぷり浸かっているのではないか。) そんな疑問や葛藤が頭の中を駆け巡るようになった。そしてついに、「私は一体どんな「治療家」になりたいのか」という疑問に直面した。(私が「疲れている」とすれば、少なくとも疲れている状態で治療することなどできない。では、どうやってその「疲れ」を癒し、重荷を下ろすのか。)

そんなとき、一人の男性の英語教師が、マラソンをすることを勧めてくれた。体を動かすことが好きだった私は、放課後その先生に伴走してもらい、盲学校の運動場や、盲学校の周辺道路を

走るようになった。その先生と走っている間は、授業のことも、性別違和感に翻弄されていることも忘れ、ひたすら無心になれた。体は走っているのに疲れているにも関わらず、精神的には「重荷を下ろした」という感覚に、私はひたすら酔いしれるようにして、ほとんど毎日、その先生と一緒に走り続けていた。

4 女性として「働く」ということ

盲学校の専攻科理療科卒業後、今度は別の盲学校で、理療科教員養成施設の受験のために、1年間学んだ。しかし、私は理療科教員の道は選ばず、就職してあちこちの治療院に、女性として勤めた。

私が勤めた治療院は、ほとんどが男性で、治療院に勤める女性は少ない。そんな中で私は、治療院で働く男たちを観察していて、次のようなことに気づかされた。

①「周辺化された男たち」の存在

心身に障害がないこと、外見へのコンプレックスを感じていないこと、女性を性愛とする異性愛規範に則った性的嗜好を持っていること、その上で、所帯をもち、かつ、稼ぎ手になっていることなど、何らかの基準を共通に満たしていることを条件に、男社会が構成されているように思われている。しかし、現実の男たちは、これらの基準をすべて満たしているとは限らない。そこで、一般的とされている男社会の基準を満たしていないと思われる男たちを総称して、「周辺化された男たち」と意味づけた。その上で、どのようにして、男たちの中から、「周辺化された男たち」が存在しているのかについて記述する。

②二重の「周辺化」

これは、心身に障害のある男同士のホモソーシャルな関係性において、最も重い障害がある男たちが更に「周辺化された状態」をいう。したがって彼等は、一般的な男性社会から周辺化された上に、自分より軽度の障害のある男たちからも周辺化されているという「二重に周辺化された状態」におかれている。逆の言い方をすれば、軽度の障害のある男たちが、自分たちより重度の障害のある男たちを周辺化することで、より一般の男社会のあり方に近づこうとする現象、つまり、他者を周辺化することで、自分の優位性を堅持したいという心性がそこにある。その代表例が「ジェンダー化された治療院システム」である。

③ジェンダー化された治療院システム

1) ジェンダー化された治療院システムの概要

一般的に、「男は女より体力があり、力も強いが、女は身体も小さいし、体力も力もない」という、男女の生物学的構造の相違を根拠としたジェンダー意識の下、治療院でもその意識を自明のこととしている。だから、強いマッサージを希望する場合は男・それほど強いマッサージを希望しない場合は女、というように、来院者が希望するマッサージの強度と術者の性別が記号化されて割り当てられることもしばしばである。このようなジェンダー意識は、治療院に従事している

術者だけではなく、事務の受付や個々の来院者も共通に内包している。もちろん、術者個人名で指名する来院者もいるが、例えば来院者で、初めから強いマッサージを希望する場合は男性・それほどの強いマッサージを希望しない場合は女性、というように、術者個人名で指名するのではなく、術者の性別で指名することも多い。

2) 視覚障害以外の障害または病気を持つ鍼灸マッサージ師の男へのバッシング

しかし、このようなジェンダー意識に基づいた自明性は、しばしば裏切られることがある。すなわち、男であっても、視覚障害以外の何らかの病気を有していることで、体力や力不足に悩む男たちがいるということである。

特に、視覚に障害のある人たちが中心で経営している治療院は、交通機関の利便性を問わず、一般社会から周辺化されたコミュニティとして認識されている。その中でも、視覚障害のみを有する彼等と比較して、視覚障害以外の障害や病気を有する彼等が、体力や力不足による業績の低迷によって、視覚障害のみを有する彼等からより周辺化された状態に置かれやすい。これは、視覚障害以外の障害や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱していること、つまり、そのような彼等とて、男の身体を有するゆえ、体力も力もあって当然、というジェンダー役割を果たしていないことを示している。そのような彼等へのバッシングは、視覚障害のみを有する彼等だけに留まらず、来院者からの直接・間接的な方法で行われる。そこに、「男の癖に」というジェンダーバイアスが加わると、彼等の男性性が疑われるほどに貶められる結果にもなる。したがってこの局面では、彼等が視覚障害以外の障害や病気を有していることへの配慮はなされず、視覚障害のみを有する彼等と同等の体力や力があるものとして扱われるのである。

また、視覚以外の障害や病気を有する彼等へのジェンダーバイアスをかけた視覚障害のみを有する彼等の心理状態として、視覚以外の障害や病気を有していないことへの優位性を堅持しながら、かつ、一般の男社会に近づこうとする心性が見て取れる。すなわち、視覚以外の障害や病気を有する彼等を周辺化しなければ、自己の優位性を保証することができない、あるいは彼等を周辺化することによって、より一般的な男社会に近づくという幻想を持っているといえるだろう。

3) 周辺化した彼等を鼓舞する目的で利用された自己の女性の身体

更に、彼等へのバッシングはそれだけに留まらない。

治療院に勤めていた当時の私は、マラソンやその他のスポーツを熱心に行っていたため、学生時代とは異なり、体力も力もいわゆる「男並み」にあった。だから、自己の体よりはるかに大きな男の体も平気でマッサージしていた。しかし、このことは一見よさそうに思えて、実は私よりも体力や力の無い男たちを鼓舞するために、私が他の男たちから「女性の体を利用された」のである。

つまり、男の身体を持つ視覚障害以外の障害や病気を有する彼等が、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者というだけではなく、女性の身体を持つ私の、これまたジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を引き合いにして、更に彼等を鼓舞しようとする意図が見て取れる。そこには、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者である彼等を、「男の癖に」

というジェンダーバイアスによって、いったん男性性を疑わせるようなバッシングをしておきながら、女性の身体を持つ私が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を示していることをうまく利用して、彼等を鼓舞しようとする意図が伝わってくる。

要するにここでは、視覚障害のみを有する彼等によって、視覚障害以外の障害や病気を有する彼等を周辺化した上で、その周辺化した彼等を鼓舞する目的で、「私」が利用されたのである。もっと言うなら、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として、女性の身体を持つ自己のジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績ではなく、「女性の身体」が、周辺化した彼等を鼓舞するための材料として利用されたのである。

5 終わりに — 今、男性として再就職

今年、私は勇気を出してハローワークに行った。最初は、鍼灸マッサージではなく、他の職種を探していたのだが、担当者から、「整形を成り立たせるという目的で、3療の資格を生かしたら」というアドバイスで、私は男性として再び鍼灸マッサージの職種を見直し、再就職した。

現在は、在宅マッサージといって、何らかの病気や歩行困難などで、自宅でマッサージを希望する人たちの家に出向いてマッサージを行うという、私にとっては新しい仕事に着いている。今のところ、まだ始めたばかりであるが、治療院で勤めていたときのように、男女の性別を意識することなく、また、動き回るのが大好きな私にとっては、要約「適職」といえる職にありついたのでないだろうかと考えている。

まだ始めたばかりではあるが、私が気づかされているのが、「私がマッサージをしたから患者さんに喜ばれる」のではなく、個々の患者さんの中に、もともと「喜ぶ力」が存在していた、ということである。言い換えれば、私が表立って誰かを「助けた」のではなく、私の行為によって、知らず知らずの内に「助かった」と言って「喜ぶ力」が、個々の患者さんに存在していた、ということである。今後、私がマッサージを仕事としていく中で、わざわざ「対人援助」なんていわなくても、個々の患者さんの「喜ぶ力」を自然に引き出すことができればよいと考えているのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）